

文字もじ MOJI の世界

26. 活字のかたち鑑賞会

向迫彩子*

人は、その対象に興味があれば見分けがつかないのだと聞いたことがある。例えば車、植物、アイドルグループ等々。言われてみれば思い当る。そしておそらく一般人にとっては文字もそのひとつであろう。明朝体かゴシック体かというくらいは判別できても、それをさらに区別するというそもその発想すらない人がほとんどではないか。もちろん私もそうだ。そうだった。

そんな私がなぜ、勤務する公共図書館で「活字のかたちを鑑賞する」という講演会を開催するに至ったのか。理由は単純である。活字のかたちを鑑賞したかったのだ。文字をみて「いいね」とか「好きだな」とかうっとりとしながら、そのかたちを愛でるということをしたかっただけなのだ。それが、まさかこんな大ごとになるとは思っていなかった。各方面に頭を下げながら、事の経緯についてご説明させていただきたい。

日比谷図書文化館と日比谷カレッジ

都立日比谷図書館という名を耳にされたことがある方は多いと思うが、その日比谷図書館が東京都から千代田区に移管され、2011年11月に千代田区の複合文化施設として生まれ変わったのが私の勤務する千代田区立日比谷図書文化館である。

本の閲覧や調べ物などのいわゆる図書館機能のみならず、歴史や多彩な文化情報を発信する「ミ

ュージウム」や、さまざまな講演会やイベントを行う「カレッジ」などの機能を兼ね備えている。その中で私は図書部門での企画・広報を担当しており、講演会に誰を招き、どのようなテーマでお話いただくべきか日々考えを巡らせている。

「フォントかるた」イベントでの驚き

2018年春。夜、眠れずにスマホをいじっていると「フォントかるた」のイベント開催告知が目に入ったので気軽に申し込んだ。「フォントに興味がある」というわかりやすい動機だ。私は業務においてチラシを作ることが多く、素人なりにどんな文字が講演会のイメージに合うか、どの文字なら読みやすいかなど考えながら、Windows標準搭載のフォントの中からあれこれ当てはめ試行錯誤している。なお、使用ソフトは主にPowerPointだ。私の「フォントに興味がある」はその程度であった。

そしてイベント当日。メインである「フォントかるた」前段のレクチャーで私は書体開発という言葉を知り、衝撃を受けるのである。

文字は、物心ついた頃にはすでにそこにあった。本にも、雑誌にも、新聞にも、当然のように文字が書かれていたので、それが誰かによって作られているという考えにも至らなかったのだ。水や空気が誰によって作られたか考えることがないのと同じように。そのため、人の手で作られ、手入れされながら進化を続けている秀英体という書体の歴史が語られたときには、大袈裟ではなく、それまでの世界が歪むほどに驚いた。

* MUKAISAKO, Ayako
千代田区立日比谷図書文化館 図書部門
企画・広報担当マネージャー、司書
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園 1-4
mail:mukaisako.a@trchibiya.jp

言われてみれば今までに、××文庫よりも○○文庫のほうが好きだな、と思うことはあったが、もしやそれは使われている書体の印象によるものだったのだろうか。私は本を読んではいたが文字は見えていなかったのだ。しかしそれは私に限ったことなのか？ 本を読む人のうち、どれだけが「文字」に意識を向けているのであろうか。文字の話は、本と別の角度から出会い直し、本への新たなアプローチを試みるヒントになるのではないだろうか。これは、日比谷図書文化館という本のあふれる場所で提示するのに最適なテーマとなりそう。

この日のイベントで同じテーブルになったのはほとんどデザイン関係の方であったが、図書館という場所で、我々読書好きが、読書に向き合う際の新たな視点を手に入れるような講演会を企画したいと思った。私はこうして「文字のかたち」というキーワードを入手し、フォントかるたでの大敗は忘れてしまうほど興奮しながら帰路に就いたのであった。

活字のかたち鑑賞会をかたちにする

興奮覚めやらぬまま、翌日、文字のかたちをテーマとした講演会を企画したいと同僚に相談した。昨日の衝撃を伝えたいのだが、うまく纏まらないままだった。それでも私はなんとか実現させたかった。「文字」という、こんなにも図書館に深い関わりがあり、しかし当たり前すぎて見過ごされている素材を眠らせておくわけにはいかないと考えた。半ば使命感にも近かった。

悩む私に、同僚が教えてくれたのが正木香子氏の著作だった。味わうように文字を楽しむという正木氏の独特の感性に驚愕し、すぐさま登壇を打診した。うまく纏まらない文字への衝撃をそのまま、さまざまな文字のかたちを楽しむ講座としてシリーズにしてしまおうと思ったのだ。そして正木氏こそが、文字のかたちを純粹に楽しむ講座の皮切りにふさわしい講師だと確信したのであった。第1回には正木氏を、そして第2回には秀英体を。

それ以降は… 追って考えればいい。こうして2019年3月から「活字のかたち鑑賞会」はスタートすることとなった。

企画が動き出すのと同時に、今度は私自身が文字について知る必要が出てきた。シリーズとして成立させるには続けなければいけない。講師には誰を招けばいいのだろうか？ 関連書籍を手にとってみるも、文字の世界は広すぎて深すぎて、そう簡単には見渡せるものではなかった。この頃になってようやく気付いたのだが、私はずいぶんと気軽に「文字のかたちを鑑賞したい」などと思いついてしまったようだ。恐いもの知らずにも程がある。それが表れているのがまさに「活字のかたち鑑賞会」というシリーズタイトルだ。いわゆる活版印刷文字だけを指すのではなく文字全般を示すつもりで「活字」という単語を使ったのだが、専門家の皆様にとっては大きな違いなのだということもしばらく気づかなかったのである。ここでお詫びを申し上げたい。

さらに講師の方との打ち合わせ時にも大変なご迷惑をお掛けしているに違いない。何しろ素人が突然「活字のかたちを鑑賞したいのですが」と相談を持ちかけるのだ。さぞかし厄介な依頼だったに違いないが、しかしどの講師の方も快く優しく丁寧に応じてくださった。これについてもお詫びと御礼を申し上げたい。しかし聞き直らせていただけのならば、私のような文字の素人にも、文字のかたちを愛でるチャンスを与えていただきたいのだ。専門家の皆様からみれば、私のような素人



「活字のかたち鑑賞会」第1回

が皆様の大切な文字について、興味本位で覗き込むのはご迷惑かもしれない。しかし、文字のいち使用者としてそれらのかたちの違いをそっと楽しむことは、どうかお目こぼし願いたい。

正木香子さんと味わう書体の世界

このような経緯で生まれた「活字のかたち鑑賞会」シリーズは、文筆家の正木香子氏による第1回（2019年3月）でスタートした。講座内では、文字のかたちの違いを味覚として楽しむという正木氏の体験から、書体の違いが情報に与える違い、情報による書体の違い、技術・文字・言葉の関係などをお話いただいた。参加者からは「書体の存在の大きさ、奥深さを知った」「読書の楽しみを更に深めてくれる内容だった」等の声とともに「もっと詳しい話を聞きたい」という要望もあり、これだけ熱心な感想が挙がるのであれば今後のシリーズ展開も安泰であるという確信を持つことができた回となった。

秀英体の生命力

第2回（2019年6月）は秀英体開発グループの伊藤正樹氏・宮田愛子氏を迎え、企画発案のきっかけとなった2005年からの秀英体リニューアルプロジェクト「平成の大改刻」のお話を中心に、書体開発の歴史的な面と実際の作業的な面の両方から説明していただいた。後半には書影や街なかに溢れる秀英体の豊富な利用事例の紹介もあり、まさに「鑑賞会」となった。参加者からは書体づ



「活字のかたち鑑賞会」第2回

くり想像以上の手間と時間がかかっていることについての驚きの声と同時にウエイト展開の要望も複数あり、参加者層の厚さを感じる回でもあった。

鳥海修さんの書体のつくりかた

第3回には字游工房の鳥海（とりのうみ）修氏を迎え、実際にレタリングする工程をご披露いただく予定となっている（10月10日開催）。書体について知っていく中で鳥海氏の名前は度々目にしていたが、決め手となったのは『本をつくる』（河出書房新社）という書籍の中での鳥海氏の姿だった。こんなにも書体と、そして谷川俊太郎氏と真摯に向き合いながら文字を作るのかと驚き、ぜひともご登壇をと依頼したところご快諾いただいた。現在続々と参加申込がきており、第3回も盛況となることが確定しているところである。

文字・活字の面白さ

こうして開催を続けている「活字のかたち鑑賞会」の今後であるが、文字の専門家ではない人向けにという基本方針は保ちつつ、図書館という開かれた知の集積場所らしく多種多様なバックグラウンドをお持ちの方に参加していただける講座でありたいと思っている。講師と参加者の熱意と愛情を支えとしてできるだけ続けていきたい。

また、この企画を期に、誰よりも私自身が日常的に文字のかたちを気にするようになったと感じている。残念ながらまだそれを正確に見分けることはできないが、これは好きだなとか、これは珍しいなとか、これはちょっとやりすぎではないかな、といった文字のかたちへの感想を自分なりに持つようになった。そして書かれたものを単に読むだけでなく、文字のかたちがなにを言わんとしているのか、その文字を選択したことで何を表現しようとしているのかを読みとろうとする姿勢を手に入れた。世界の解像度がぐっと上がり、今まで見ていた世界を改めて発見できているような興奮がある。この面白さを少しずつでも広めていきたいと思っている。 ■